

氏名 (本籍)	胡 耀 花 (中国)
学位の種類	博 士 (医学)
学位授与番号	甲第 306 号
学位授与日付	平成 8 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	Trends in aortic aneurysms in Japan 1) Increasing trends in mortality rate of aortic aneurysms in Japan, 1955~90 2) Trends in prevalence rates of asymptomatic aortic aneurysms in Japan based on autopsy series
審 査 委 員	(主査) 教授 清 水 弘 之 (副査) 教授 岩 田 弘 敏 教授 広 瀬 一

論 文 内 容 の 要 旨

第1篇では、日本における大動脈瘤死亡の疫学的特徴を知るため、日本人口動態統計を用いて、性、年齢、型別（梅毒性大動脈瘤を除く）大動脈瘤死亡率が世界人口で標準化して計算された。比較のため「英国死亡統計」及び「米国死亡統計」を用いて両国の大動脈瘤死亡率が計算されている。

一方、多くの大動脈瘤は無症状のため、「日本病理剖検輯報」を使って1960年、1965年、1970年、1975年、1980年、1985年、1989年の無症状大動脈瘤（梅毒性大動脈瘤を除く）の剖検例中に占める割合（以下、剖検割合と称する）が計算された。ここでは臨床診断の記載がなく剖検診断に大動脈瘤の記載のあったものを無症状大動脈瘤と定義している。剖検割合の年齢による標準化には、死亡率同様世界人口が用いられた。

解析結果の主な点は、次の通りである。

1) 大動脈瘤死亡率について：

1955年に人口10万対男0.43、女0.23であった日本の大動脈瘤死亡率は、その後一定して増加の傾向にあり、1990年には人口10万対それぞれ11.0と4.5であった。1955に比べて男性では約25倍、女性では約19倍増加したことになる。1990年の死亡率の男女比は2.4。型別では男女とも腹部大動脈瘤が一番多かったが、増加率では解離性と胸部大動脈瘤が高かった。年齢別では64歳までは解離性大動脈瘤死亡率が高く、65歳以上は腹部大動脈瘤が最も高かった。

一方、英国における大動脈瘤は1970年に人口10万対男28.6、女12.4であったが、1989年にはそれぞれ45.8と16.5であった。男女とも日本より約4倍高かった。最も多くかつ増加したのは腹部大動脈瘤で、解離性大動脈瘤は減少していた。1965年から1985年までの米国における大動脈瘤死亡率は増加の傾向が見られず、1985年に人口10万対男6.6、女2.2であった。

2) 無症状大動脈瘤有病率について：

1960年から1989年の日本における剖検で見つかった無症状大動脈瘤の中最も多かったのは、男では腹部大動脈瘤（35.1%）、女では解離性大動脈瘤（36.1%）であった。無症状大動脈瘤の剖検割合は男女とも増加の傾向が見られず、男では1,000対2.7、女では2.0であった。胸部大動脈瘤の剖検割合は男より女のほうが高かった。年齢、型別で見ると、50歳まではすべての型の大動脈瘤剖検割合が低く、60歳以上で増加した。女では型別の剖検割合に大差を認めなかったが、男では腹部大動脈瘤が、胸部大動脈瘤および解離性大動脈瘤の2倍を示した。

論文審査の結果の要旨

申請者 胡 耀花は、日本人口動態統計および日本病理剖検輯報を用いて、日本の大動脈瘤の記述疫学研究を行った。人口動態統計に記載されている項目に限りがあることから、細部にわたる分析に若干の不足のあることは否めない。しかし、申請者が明らかにした日本における大動脈瘤死亡の動向は、記述疫学の基本に則ってデータの比較性に十分考慮を払っての分析結果であり、この分野の研究者に基本的情報を初めて提示した点で高く評価できる。また、病理剖検例中無症状で発見された大動脈瘤の割合は、定義そのものに論議の余地があるものの、病理剖検輯報が持つ情報の欠点を把握し、それを考慮した上での分析であり、40歳以上の日本人では約130人に1人は大動脈瘤を有していることを示唆したことは、集団検診の実施に関する行政判断の材料として有益である。加えて、死亡率と無症状発見の割合の比較から提示した大動脈瘤の発生要因と破裂に至らしめる要因が異なるのではないかとの仮説は、今後の分析疫学研究への展開に当たって重要な提言をしたものであり、本論文は学位論文として十分に価値あるものと判断した。

[主論文公表誌]

1. Increasing trends in mortality rate of aortic aneurysms in Japan, 1955~90.
Tohoku Journal of Experimental Medicine 171 : 221~228, 1993
2. Trends in prevalence rates of asymptomatic aortic aneurysms in Japan based on autopsy series.
Journal of Epidemiology 5 : 159~163, 1995